

## 「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

組織局長 岡本 美穂

「斎藤喜博氏がこのようなことを言っています。『また父母や教師の、基礎学力の考え方もいわゆる『字のできる優等生』の子どもをつくりあげるためのものでした。したがって教師にとっては、子どもたちに、知識を切り売りし、それを、忠実に習得させることだけが目的だったのです。学び取ったことを武器にし、ふみ台にして自分自身をしあわせにし、またお互いの生活のしあわせを創造していくための基本的な考えに欠けていたのです。』（斎藤喜博全集別巻Ⅰ）この中の特に「学び取ったことを武器にし、ふみ台にして自分自身をしあわせにし、また、お互いの生活のしあわせを創造」という言葉につながる「整理学習」について追求していきます。

### ◆3年国語「サーカスのライオン」

主人公である「じんぎ」。「じんぎはどんなライオンですか。」と発問したところ、子どもたちからは、「おいぼれた・年取ってい

るライオン←疲れている・一日中眠っている・二本でも三本でも火の輪をめがけてジャンプできる・しよげている←がっかり・元気がない・さみしい・がんばっている・アフリカの夢見ている←毎日・家族一緒に草原・お父さんやお母さんや兄さんたちが夢に現われ←会いたい・もつと会いたかった・なぜ、しよげているのか？気になります」というようにどんどん意見が出てきました。

そして私はその意見を整理しながら板書をしていきましたが、あくまでも羅列しているようにしか見えません。しかし、整理学習という視点が加わると、例えば、発問「なぜ、しよげているのか理由を考えよう。」という場面では、子どもたちが、

「①毎日おなじことばかり ②元気がない  
③おいぼれた④あきている⑤つれてこられたから、つかまって⑥つかれる ⑦たいく

つ ⑧帰りたい」と出したところで、

「だれか仲間分けできない？」と聞き、

2と6 5と8 1と4 1と7

「ではこれを短く3つに整理してみよう。」

A: 同じことばかりでたいくつ

B: おいぼれた

C: アフリカの夢 帰りたい・恋しい

「さあ、どれに思ったか？アンケートをします。またどうして思ったのか、理由を探そう。」と伝え深めていきました。ここで、子どもたちがBCに分かれて話し合いたいということまで分かれて話し合いながら根拠を探しました。進めていくうちに友だちの発言を今まで以上に真剣に聞く子どもたちの姿がありました。

思考の整理としての整理学習の機能ももちろんですが、それを全員で集約していく過程にこそ他者の思いを図り知ることができるとは思いません。整理学習の私自身の価値づけがかなり深まったように思います。

### ◆整理学習が必要なわけとは？

教師人生を振り返り原点の一つになっていると思える出来事があります。それは、

教育実習です。私は大阪教育大学の附属池田小学校で一ヶ月お世話になりました。私の担当を下さった和田先生は今も大学の教員をされていて、算数が専門の方でした。しかし、私が覚えていることは授業以上に、子どもとの接し方、子どもの見方の発見でした。表面的なことだけでなく、そこからどう受け止めるのか。また子どもの自然な表情、自然な発言が湧き出るような、そんな子ども理解をされた学級経営をされていたので、附属の子どもだから・・・という見方は全くなく、一人ひとりの子どもとどう向き合っていくか、その集団とどう授業をしていくか、一人ひとりの発言をどう集団と絡み合わせるのか、というように常に個人と集団のかかわりについて意識がいつっていました。

そして今回その附属小学校の研究発表会に参加し感じたこと、それは授業において子ども同士の絡み合いを、この学校では全く必要としないのではないか、という疑問でした。個々の先生方の力量はすごいものです。ですから、そういう個人の先生方を責めたり批判したりするつもりは全く

ありません。しかし、これだけ、主体的・対話的と言われている現代において、対話的があくまでも、教材との対話・教師との対話レベルでしかないということです。確かに、授業中ペアで話します。ものすごく話します。活動レベルでいうと、素晴らしいのですが、そこに子どもの「話し合いたい、発信し合いたい」という思いがないのです。つまり「共同」の意識がないということです。それ以上に、子どもたちの「先生に認めてもらいたい」という思いが見えてしまい、そこに友だちがどう考えているのか？という意識などは感じられませんでした。授業での「話し合い」「交流」とはどのような価値があるのでしょうか。斎藤喜博氏は、「私たちは、良い学級をつくるとか、教科の学習をとおして人間関係を集団化するとか、また前にも書いたように教材の教え方の研究をしたり、定石をつくりだしたりして、努力をしているのです。そうでないと、お互いに助け合ったり、励まし合ったりする子どもにはならないで、競争的で排他的な子どもになってしまうのです。」と主張しています。(斎藤喜博全集別巻1)競争的で排他的

な子ども、これはまるで今の社会を表しているようです。まさに「格差」。附属の子どもたちは、恵まれた環境のなか、ものすごい勢いで教師が引つ張った授業をしても必死についてくるのです。負けず嫌いな子どもたちです。附属の先生方はそんな子どもたちのことを「附属ですが、算数や国語の嫌いな子どもはいます。それは公立とかわりません。そこは工夫しています。」と研究討議会でお話されていましたが、私たちが悩んでいることと次元が違うのではないのでしょうか。私たち公立小学校では、それ以上にどうしようもできないような無力さ、塾に行けないけれども「賢くなりたい」と願っている子どもたちを救うには何ができるのか、そんなことを日々悩んでいるのではないのでしょうか。

それぞれの先生方の板書や教材解釈、授業にいたるまでの過程など見習うべきポイントはたくさんありました。ただ、「共同」の意識が見えない違和感が残りました。それぞれ学校によって悩みは様々です。

「共同」という視点はどこにおいても大事にしていきたいものです。